

石麻呂爾吾物申夏瘦爾吉跡云物曾武奈伎取食、
瘦々母生有者將在乎波多也波多牟奈伎乎漁取跡河爾流勿。

右有吉田連老字曰石麻呂所謂仁教之子也其老爲人身體甚瘦雖多喫飲形似飢饉因此大伴宿
禰家持聊作斯歌以爲戲唉也

〔物類稱呼二動物〕鰻鱈うなぎ山城國宇治にてうちまろと云此魚の小なる物を京にてめぞう。
なぎと云是はみすうなぎの誤也江戸にてめそと云上總にてかようと云又くわんよツこと
も云常陸にてがよこと云信濃にてすべらと云土佐にてはりうなぎと云今按に京都にてうな
ぎを鮓となすは宇治川のうなぎをすぐれたりとすよつて宇治麻呂と人の名を以てす江戸にては淺草川深川邊の產を江戸前とよびて賞す他所より出すを旅うなぎと云又世俗に丑寅の
年の生れの人は一代の守本尊虛空藏菩薩にて生涯うなぎを食ふ事を禁すと云○中略

海鰻うみうなぎ畿内にて海うなぎと云西國或は伊豆熱海にてうみぐらなはと云攝州西宮
海邊にてへんびと云此魚海邊の穴の中にあり漁人多く釣こと有毒ありと云傳て濱に捨蛇に
似て黃色に黒文有

〔大草家料理書〕一字治丸かばやきの事丸にあぶりて後に切也

〔庖丁聞書〕一字治丸といふはうなぎのすし也

〔皇都午睡三編上〕流行詞は日々夜々に變化して何國でも所限りにて世間一統に通用はせねど
大坂にて鰻をうと計り云ひ京にて長と唱ふ泥龜を丸と計り洒落て云へど江戸の俗は御町摩
に鰻泥龜と唱へり

〔本朝食鑑〕西湖無鱈鰻鱈魚

釋名鱈天鮎音善中略予平野必大謂無奈木者今之字奈岐歟鱈者海鰻也然鰻鱈名白鱈則於名不
釋天鮎者鰻也文字集略謂黃魚銳頭口在頸下者也鱈者二名鮎者泥鰌鮎者鱈者鱈也